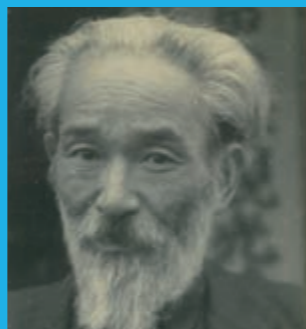


郷土富山の文化を研究 翁久允

ジャーナリスト・文学者

「移民地文学」の先駆け

郷土研究雑誌「高志人」を創刊



1888 (明治21) 年2月8日—1973 (昭和48) 年2月14日

寄宿舎生活を送り、文学を愛する

上新川郡東谷村 (現立山町) で漢方医翁源指の二男に生まれ幼名は允といました。

県立富山中学校 (現県立富山高校) へ入学し、寄宿舎生活を送りました。文学を愛し、文学の会な

どで才能を発揮していました。



富山中学校時代の久允 (後列右) 「(資料翁久允と移民社会 [1] 移植樹) より」

広く世界を見てみたい

富山中学校3年生 (当時は5年制) のとき、英語教師の舎監 (寄宿舎を管理、監督する先生) に反抗し、仲間と一緒に人の排泄物を床にまく事件を起こしました。優秀な生徒が集まる学校での事件は新聞にも報じられ、大問題になりました。久允は中心人物ではありませんでしたが、他の7人とともに退学処分となりました。

富山にいづらなくなった久允は兄

を頼って上京し、今の滑川市出身の女性運動家、中川幸子の私塾「三省学舎」に入りました。久允が海外への関心をもったのは、次に入学した順天中学校 (現順天高校) の地理の先生の影響でした。

19歳の春、一人でアメリカのシアトルへ渡り、イチゴを摘む仕事、エレベーターボーイなど職を転々として苦労を重ねた後、現地の日本語新聞に随筆や小説を載せたり、

サンフランシスコで日米新聞の記者として活躍したりしました。



記者をしていたころの久允 (『わが父翁久允』より)

日本人移民の生活を紹介

当時のアメリカでは、日本と日本人を排除しようとする運動がありました。アメリカに17年間滞在した久允が痛感したのは、そうした排日運動にからんで日本人移民がひどい生活を強いられていることです。1923 (大正12) 年、久允が初めての短編集『移植樹』を出版すると、アメリカの日本人社会で大きな反響を呼びました。

久允が「移民地文学」の先駆けと言われるのは、この作品をはじめとして移民地を舞台にした多くの小説を発表しているためです。

久允は帰国後に朝日新聞社へ入社しました。『週刊朝日』の編集長にもなり、ジャーナリストとして活躍しました。久允は菊池寛・泉鏡花・川端康成ら多くの小説家や画家たちと交流しました。



アメリカで撮影した写真 (前列左が久允) 「(資料翁久允と移民社会 [1] 移植樹) より」

* 移民地文学 [いみんちぶんがく] 移住して異国で生活する日本人たちの人生を通じて、異文化交流や集団の中の個人の存在などを描く文学の分野です。翁久允の作品がその先駆けとされます。

富山の郷土文化を研究

1931 (昭和6) 年には美人画で知られる竹久夢二とアメリカへ行き、2年後はインドに渡り、各地の寺院を巡ってきました。帰国後の久允は仏教の世界を主題にした作品を発表しています。

次に久允が情熱を燃やしたのは、郷土富山の研究と郷土誌の発行でした。民俗学者の柳田国男に相談し、1936 (昭和11) 年、郷土研究雑誌「高志人」を創刊しました。久允は東京と富山を往復して郷土文化の掘り起こしに努め、37年間にわたり、398号まで発行を続けました。

その間、久允はこの世を「真」「正」「愛」に満ちた理想の世界にしたいと願うようになりました。戦争が終わった1945 (昭和20) 年、57歳になった久允は富山へ帰り、今の富山市磯部町 (護国神社の一角) で建てた新居は、久允が

85歳で亡くなるまでの文章を書く活動の拠点となりました。

1953 (昭和28) 年に宗教法人「三尊道舎」を設立し、自宅はその道場としても使われました。

久允は80歳になって「曼荼羅画帖」を描き、それを売って得られたお金で学問を奨励し、研究費を援助する財団をつくりました。現在も「翁久允財団」の名で郷土の人材の育成に役立てられています。また、富山市立図書館には、約2700点の翁久允文庫があります。



郷土研究雑誌「高志人」 (富山県立図書館蔵)



久允が住んだ三尊道舎 (富山市磯部町)



久允が海外や国内の旅の思い出を描きつづった画帖

夢や志をかなえたポイント

- どんな状況でも勉強の意欲を失わない
- 就きたい仕事への夢をあきらめない
- 富山の歴史や文化についてよく知る

1888 (明治21)	0歳
上新川郡東谷村に生まれる	
1902 (明治35)	14歳
県立富山中学校に入学	
1905 (明治38)	17歳
上京し順天中学校に編入	
1907 (明治40)	19歳
アメリカへ渡る	
1910 (明治43)	22歳
邦字新聞公募の新年小説に入賞	
1921 (大正10)	33歳
ワシントン軍縮会議に特派員として出席	
1923 (大正12)	35歳
初めての創作集『移植樹』を出版	
1924 (大正13)	36歳
帰国し朝日新聞社に入社	
1936 (昭和11)	48歳
月刊『高志人』、『図説世界史大成』全11巻を出版	
1949 (昭和24)	61歳
仏典書を執筆	
1971 (昭和46)	83歳
『翁久允全集』10巻をまとめる	
1973 (昭和48)	85歳
全集の仕事に亡くなる	

コラム 竹久夢二と一緒に宇奈月を訪問

久允はシアトルにいたとき、日本の兄に夢二の絵入りの小唄集『三味線草』を送ってもらってから夢二のファンになりました。夢二は大正時代に活躍した画家で詩人です。数多くの美人画を残し、その作品は「夢二式美人」と呼ばれています。

久允は1928 (昭和3) 年6月、夢二を黒部峡谷に誘いました。二人はトロッコ電車に乗ったり、夜は宇奈月の旅館に泊まるなど、旅を満喫しました。



夢二の著作本『三味線草』表紙 (夢二郷土美術館蔵)